



僕の親友



ヤマダヒフミ

「所詮、世の中の連中なんて大した事ないさ。この程度だよ」

と、酔ってきたツダは言った。ツダは、酔うといつもより三倍くらいは饒舌になる。

「俺はさ・・・ゴッホのように死にたいんだよ。あるいはニ・チェのように、ね。俺は・・・今、この世界で、誰にも自分が理解されていないという事を誇りに思っている。俺はね・・・シドウ。自分の孤独を潔癖に保ったまま、死にたいんだ。自分の孤独が真っ白な状態のまま、死にたいんだ。・・・その場所を、この、まるで新雪のように美しい俺の孤独を、世の中の連中に、誰一人として渡したくないんだ。・・・いや、ほんとのところ」

そう言ってツダは、自分のチューハイを最後まで、ぐいっと飲み切る。僕には、ツダの言っている事が、完全には分からないのだが、その意味を把握しようと試みる。・・・僕は優しいのだ、と自分でも思う。ツダのような人間の言葉を聞く人間は、僕以外には一人もいないに違いないのだから。

「なあ、生きる事って、どういう事か、分かるか？」

と、ツダは僕にツダにお馴染みの「-----」というか、飲んだオッサンに特有の(ツダも僕もまだギリギリ二十代だったが)質問を発してきた。

「・・・さあな。どういう事なんだ？」

と、僕は相手の話を聴く態勢を取ってやる。

「生きる事っていうのは・・・いや、そんな事、言うまでもないか。キミはサラリーマンをやってるんだらう?・・・。しかも、早稲田の理工学部を出た後に大手の電化企業に就職したエリートだ・・・。だったら、俺の言っている事が即座に飲み込めるだろうさ。キミが毎日毎日、やっている事・・・。つまり、インチキだ」

「インチキなどやっていないさ。僕は・・・」

と、僕も思わず反論する。

「わかってるよ。わかってる。そう、怒るな」

と、ツダは僕をたしなめるように、両手を上げて上から下へとひらひらさせた。

「俺だってわかってるさ。キミが優秀な社員だっていう事ぐらい。キミが社会秩序を重んじ、それを形成している一人の人間だっていう事ぐらい。・・・だがな、俺の言っている事もまた事実だ。・・・いいか、生きる事は、インチキにほかならないんだ。・・・何故かって?・・・それはさ、この世界全部が嘘でできているからだ」

「どういう事だ？」

と、僕は眉を潜めて聞く。

「考えても見ろよ。・・・君の企業が何を作って、何を社会に提供しているかを。・・・そして、その提供された連中が、どの程度、通俗的な生き方と考え方を持っているかを。・・・いいか、例えば、安くてうまくて早い、ファーストフードがこれだけ普及したのは良い事だ。それは間違いない。それは、『忙しい』サラリーマンにぴったりだ。・・・で、そのサラリーマンは何を作っているんだ?・・・これまた、忙しいサラリーマンにぴったりの、新たな情報サービスか?・・・いいかい、この社会は回りに回っている。世界は回りに回っているが、その全てが、一体、どこに向かってる?・・・思想、哲学、そんなものはもう廃れた。二十世紀というのはクソの時代だった。ヒトラー、スターリン。彼らがいかに高邁な哲学を語り、そして、下劣な事をしでかしたかは見てのとおりだ。・・・だがな、ろくでもないのは彼ら権力者だけじゃないんだよ。そうじゃなくて、俺達自体がとんでもなく下劣なのさ。・・・価値観?・・・俺達には、金という一つの基準、その価値観しかない。・・・どうだよ、見てみるよ?・・・政治家は、「あなたの将来を明るくします」などとぬかしているが、結局の所、それは金銭的解決の事をさせているんだよ。もちろん、今の政治家に、そんな解決はできないにきまっているが、だがな、金銭的解決がそのまま、人間の幸福に直結するとは、誰もが認めているじゃないか?・・・。右翼にしろ、左翼にしろ、同じ事だ。どっちにも、俺はうんざりなんだよ、全く・・・。じゃあ、いいか。俺が金をたんまり持っているとして、一体、どうするっていうんだ?・・・考えても見ろよ。・・・キミはすぐに、そういう立場になるに決まっているから、この事は考えてみる必要があるさ・・・本当に。キミはどうする?。高層ビルの七十五階に4LDKだか5LDKだかの住居を構えて結婚し、子供たちを馬鹿高い学費を請求する私立学校に入れるか?・・・。そして、キミはポルシェだか、ランボルギーニを乗り回すのか?。・・・いいか、よく考えるんだ。この世界は実に複雑怪奇にできている代物だが、その頭に宿っているのは、実に貧弱な観念でしかない。考える、考えるんだ・・・。大体がランボルギーニを東京の市内で乗り回す事に、一体何の意味がある?・・・ただ移動するだけなのに、別に二百五十キロで飛ばす道なんてどこにもないのに、F1レーサーでもないのに、どうしてそんな馬鹿みたいな車を乗り回さなきゃいけないんだ?・・・。シビックでいいだろ。それで十分だ。・・・教育に金をかける?・・・笑わせるなよ。全く。ほんとにさ・・・いいか、私立の高い学費を請求する学校なんか、何一つ分かっていない能なしの連中にすぎないが、彼らは、一つの事だけをわかっているんだよ。つまり、体裁を良くして、そうして金持ち連中から金を巻き上げるっていうその方法をね。・・・ただ、それだけの事さ?・・・。大学?・・・おいおい、笑わせるぜ、それこそ。おい、大学教授のどこに、まともに学問をしている連中がいる?哲学?科学?・・・おいおい、笑わせるぜ。彼らは過去の哲学者や科学者やその摂理をぐじぐじといじくって、それでその日その日の金を得ている連中にすぎない。いいか、わかるか・・・。『本当に哲学するとは、哲学を馬鹿にする事だ』。このパスカルの言葉の意味を、真の意味で理解でき、そして、実行できる奴が、この世界のどこにいる?・・・おいおい、何が学

問だよ。笑わせる。世界はな、インチキに満ちているんだよ。・・・もし、今の時代に、パスカルやデカルトがいたとしても、彼らは、この世界にうんざりして、どこか端の方で自分自身の真理を開拓しているに違いない。こんな馬鹿な連中と一緒につるんでたら、こっちまで馬鹿になるからな」

「じゃあ、貧乏人はどうなんだ?金持ちよりはマシなのか?」

と、僕は自分の興味から聞いてみた。・・・ツダは今、バイトしかやっていないから、どっちかという「貧乏」の方に位置する。だが、ツダは「金持ち以下だよ」と半笑いで答えた。

「貧乏人っていうのは金持ちより、ひどい連中だね。・・・全く。彼らは、妙な人権だの権利だのを覚えたので、自分達が不幸に陥っているから、金持ち連中を攻撃して、その金を横取りする権利があると本気で錯覚している。・・・いや、もうどうでもいいんだよ。全部が。・・・だって、貧乏人がステップアップすれば金持ちになるが、結局、精神の貧しさは変わっちゃいない。魂の貧しい奴はどこに行っても、あの世へいこうがどこへいこうが貧しいが、彼らの求めるのは表面的な服装の華美さだけさ。まあ、こういう言い方は、モラリスト風だがね」

そう言うと、ツダは手近の厚焼き玉子をほうばってから、頼んでおいたレモンチューハイをぐっと飲んだ。その様子を見ていて、僕は何か言いたくなかった。

「じゃあ」

と、僕は言った。

「何もかも駄目なのか」

「駄目だね」

と、ツダはあっさりと言った。

「最近、パスカルを読んでるんだが・・・」

と、ツダは言った。

「そこに『神なき人間の惨めさ』っていう事が書いてある。・・・要するに、神がいない人間は、惨めでどうしようもないって事さ。パスカルの説によれば・・・っていうかも、普通に考えれば、王様も貧民も平民も、何から何まで惨めなんだな。・・・そして、人間はとにかく惨めだという事が、パスカルの精緻な頭脳によって論証される。あんな賢い人間は、後にも先にもいないから、あんな風に論証されたら、こっちも言い返す言葉がなくてね。・・・それで、最後には『考える』という事がある。・・・人間の栄光は考える事にある、だとよ。栄光とは言ってなかったかな・・・まあ、いや。それで、要するに、人間は惨めで、まあ、考えたって、惨めって事なんだろうな。考えるって事は人間に与えられた恩寵なのかもしれないけど。・・・だって、そこまで賢かったパスカルは、最後にはキリストに服す事になるからな・・・」

僕はツダの言っている事が半分もわからなかった。僕はパスカルを一行も読んだ事がないからだ。

「じゃあ、もう、どうすりゃいいんだい?」

と、僕はたまりかねて言った。

「どうもしないさ」

と、ツダは相変わらず、あっさりと言った。

「・・・別にどうもしないよ。俺はね・・・驚くんだよ。世の中の連中が、こんなにも『自殺』というものを考えた事がない、というその事実。日本っていう国は、なかなか繊細な国だから、自殺者の数が多いらしいがね・・・だが、どうして、誰も彼も、もっと『自殺』というものを考えないのか、俺には実に不思議だね・・・。生というのはこんなにも絶望にも彩られているのに、愚かさだけが、それを見えなくしている。だから、みんな生きる事にすがりつく。考えてもみなよ・・・」

そう言って、ツダは何故か、両手を高く掲げて見せた。

「考えてもみな・・・。例えばここに、自分の将来を理想化している人間がいるとする。・・・将来、自分は金持ちになるだとか、幸せな結婚生活を送れるだとか、仕事をドロップアウトして、ゆっくりした老後を送れるとか、実に様々な理想や夢がある。・・・だが、彼らが実際に、それに出会うと、百パーセント、彼らはそれに失望する事にする。現実とは違うからな。だが、彼らは、失望するまでは生きている事ができる。で、世の中の連中というのはどいつもこいつも能なしだから、失望や絶望にたどり着くまでにいかないのさ・・・。絶望にたどり着くには、パスカルの頭脳と心情を要する。そうして、あの天才は、千年に一人の人間だ・・・」

そう言うと、ツダはどこか悪魔的な相貌になって、目の前のグラスを眺めながら話を続けた。

「だから、俺達の生を救ってくれているのは、俺達の愚かさなんだよ。・・・それ以外にないんだ。・・・全くの所。・・・いや、ほんとうに。・・・例えば、俺達の目の前には断崖絶壁がある。そこに落ちたら、間違いなく確実に『死』だ。そして、俺達はみんな、背中の方から、化け物に追い立てられていて、そうして少しずつ、その崖の方に近づいてくしかない。・・・で、この化け物って奴も巧妙で、意地悪いから、俺達をちょっとずつ、ちょっとずつ、その断崖の方へ行くように仕向けるんだな。・・・俺達に逃げ場はない。だから、みんな、その断崖の方へ進んでいかざるを得ないわけだ。・・・で、だ。ここで、俺達を救うのは何だと思う?・・・あるんだ、俺達を一つだけ、救う方法という奴が」

・・・そう言って、ツダは天に向かって指を一本立てて見せた。

「それこそが『愚かさ』っていうわけだ。・・・つまりな、俺達は、念じるんだよ。次のようにな。『あの先は断崖じゃない、天国だ。あの先は断崖じゃない天国だ、あの先は断崖じゃない天国だ・・・』。で、これをしまいは、みんなで合唱するんだ。『あの先は断崖じゃない！天国だ！』・・・もうみんなで大声張り散らして大合唱さ。・・・すると、その先は本当に断崖じゃなくて、天国に見えてくる。・・・そしてついでに言えば、俺達を追い立てている化け物だって、その内、俺達を天国へと促す天使の群れに見えてくるかもしれないな。・・・まあ、これが世間で言うところの『希望』って奴だ。・・・物が見える人間には絶望しかないが、物が見えないという事が人を救う。俺達がこんなにも元気澆刺で、明日への希望なんて言っている事ができるのは、全部俺達の愚かさのためさ。俺達は目が見えないから、未来は明るいと、勝手に愚かな想像力を羽ばたかせられるのさ」

そこまでツダは言う、持っていたグラスを置いて、目を閉じた。・・・僕はそこまでツダにまくしたてられて、何も言う事ができないでいた。自分の内心の中にはざわついていたものがあったものの・・・。

僕は店員を呼んで、水を二つ頼んだ。もうそろそろ潮時だったし、ツダももう随分と酔っているようだったからだ。・・・そして、その時、ふと、一つの疑問が浮かんだ。

「だったら」

と、まだ目をつむっているツダに僕は話しかけた。

「君はどうするんだ？」

ツダは目を開いて、うろんな目をこちらに向けた。

「もし、絶望しかないのなら、どうするんだ？自殺するのか？」

それはシビアな質問だったが、僕は、聞かないわけにはいかなかった。

「どうかな？」

と、ツダは酔った目を宙に漂わせた。

「・・・さあ、まあ、自殺する時は自殺するさ。だが、俺はこの断崖を楽しむかな・・・。もしかししたら、俺には、絶望を楽しむ事ができるかもしれないし・・・」

そう言いながら、ツダはこちらを見て、ニヤッと笑った。

「それに、この怯えた子羊のような人々の動きは、見物するのに楽しいかもしれない・・・。まあ、俺も落ちる一員なんだけどな・・・。問題は、沈没する船の中にいて、その事を知っている人間と知らない人間がいるって事だ。俺は・・・そうだな・・・」

と、ツダはもう一度、視線を上げて考えようとした。そして、その濁った視線は宙を這った。

「さあ、どうするかな。どうするか・・・」

・・・そう言って、ツダはテーブルに大きな音を立てて、崩れ落ちた。持っていたグラスが割れ、氷が中から飛び出してきて、僕の服に当たった。店員と客が同時にこっちを見て、店員がパタパタとこっちに走ってくるのがわかった。

※

僕はツダを自分のアパートまで連れて行く事にした。僕はツダを肩にかついで店を出ると、タクシーを呼んで運転手に僕のアパートまでの住所を告げた。ツダはタクシーの中では、ぐっすり眠っていた。僕はその眠り顔を見ながら、やれやれ、何故こんな友だちを持ったのか、と半ばは本気で、半ばは冗談で考えた。・・・だが、と僕は考えた。こいつは、会社で会う人や、大学でできたどんな友達や恋人とも違った毛色の人間だ。こいつは・・・異常な人間だ。そして、何かを持っている・・・。

アパートまでつくと、タクシーの運転手に礼を言い、何とか階段を登って、ツダを僕の部屋の中に押し込んだ。そして、ツダの頬を軽く叩いて、目を覚まさせた。

「おい、起きろ。僕のアパートまで連れてきてやったぞ。おい」

あ・・・？、と言って、ツダはようやく少し意識を取り戻した。僕はツダを連れて行き、僕のソファに寝かせた。ツダは薄く目を開きながら、「悪いな」と、老人のようなぼそぼそしたか細い声で言った。

「おい、ツダ」

と、僕はまだ、意識が半分くらいしか戻っていないツダに向かって言った。・・・僕は飲み屋で言われた事の復讐を、今、果たそうとしていた。

「お前の絶望の哲学は、こんなものか。お前の大層な言葉、その哲学の結論は酔いつぶれて、その挙句、友達のアパートに連れて帰ってもらう、そんなことなのか。それがお前の哲学の答えなのか？」

・・・だが、ツダは聞いていなかった。彼は目をつむり、その意識はまた闇の底に戻っていた。・・・やれやれ、と僕は呟いた。こいつは多分、その言葉とは逆に、そんなに簡単に死にはしないな・・・と僕は思った。だが、もし、そうだとすると、そんな風にして死なずに生き続けるこいつの人生とは一体、なんだろう・・・？。

だが、僕はそんな抽象的な思考を続ける事はできなかった。・・・大体、そんな小難しい事を考えるのは僕の得意とする事ではない。それをするのは、こいつーツダの仕事だ。

やれやれ、と僕はツダに薄い上掛けをかけながら呟いた。僕もシャワーに入って、寝なければ。僕は平凡人だ。月曜になったら、月給もらう為に仕事へいそいそと出かける平凡人なんだ。僕も酔いを覚ましてから、寝なければ。

・・・翌日、目覚めると、ツダはソファの上から消えていた。そして、その上には「昨日は悪かったな」という小さなメモと共に、タクシー代と書かれた紙切れもあった。そしてその紙切れの下には、五千円札が一枚置いてあった。

僕の親友

<http://p.booklog.jp/book/74443>

著者：ヤマダヒフミ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yamadahifumi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/74443>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/74443>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ